

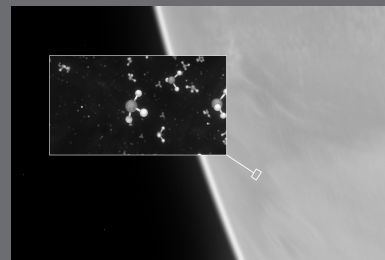
vol.
198

今月のお題
.....

インパクトのあるプレスリリース

観測成果を魅力的かつ誤解なく紹介するために、いつも悩みながらプレスリリースを準備しています。金星にホスフィン検出のニュース、どうぞ覧になりましたか？

高梨直広（東京大学）／平松正顕（国立天文台）



金星の想像図と、その中に見つかったリン化水素のイラスト。(Credit: ESO/M. Kornmesser/L. Calçada & NASA/JPL/Caltech)

アルマ望遠鏡とハワイの電波望遠鏡JCMTによって金星にホスフィン(リン化水素、 PH_3)が発見されたというニュースが、世間をにぎわせました。ホスフィンは、太陽系外惑星における生命の指標と考えられる分子のひとつです。木星や土星、あるいは年老いた星のまわりでは生命がいなくてもホスフィンができますが、金星では大気内で考える化学反応や火山などでは観測されたほどの量のホスフィンができないため、これまで考えてこなかった化学反応でできたか、あるいは生命由来の可能性も否定できない、と研究者たちは考えています。

ニュースでは「金星に生命の痕跡？」という見出しが目立ちました。この「？」には本当は研究者の迷いが反映されているはずですが、その信憑性が5割なのか1割なのかを見出しただけから判断するのはなかなか難しいですね。

今回のような「話題になりそうだけれ

ど、言い方に注意しないと誤解を招く」観測成果をどのようにプレスリリースするか。これは難しい問題です。筆者(平松)はアルマ望遠鏡成果のプレスリリースをたくさん書いていましたが、実際に研究を行った研究者との意見交換は欠かせません。今回であれば「得られた信号がホスフィンである確度はどれくらいか」「未知の化学反応起源と生命起源、それぞれ可能性がどれくらいとを考えているか」を確認したうえで、「タイトルで生命起源の可能性にどれくらい触れるか」「本文ではどんな調子でそれぞれの可能性を述べるか」を考えます。今回は、研究者としても生命の可能性をそれほど強く押し出すべきではないと考えていたそうなので、国立天文台からのプレスリリースは少し抑え気味のトーンでまとめることになりました。そのせいかアルマ望遠鏡Twitterでの盛り上がりはいまひとつでした。「バズ」への誘惑に負けない

ことも、時には重要です。

将来、ホスフィンを作る化学反応が金星で見出されるかもしれません。あるいは、そもそもホスフィンの信号じゃなかったという追観測成果が出るかもしれません。もちろん、生命発見!という可能性も残されています。日々進んでいく科学の1ページを取り出して紹介するのがプレスリリースですが、それは結末ではなく将来への伏線です。そんなことを考えながら、日々の研究成果を楽しんでいただけだと思います。